

ハシエンダ・ルイシタ 11・16

河合 大輔

かわい だいすけ

科研プロジェクト「アジア現代女性史の研究」の共同研究会議が1月マニラで行われた。その滞在期間中、フィリピンの女性たちがまさにいま置かれている状況を知るために、いくつかの場所を訪れ調査を行った。なかでもルイシタ農園のストライキ現場は、労働者と農場所有者、さらに政府をも含めた激しい社会的紛争が現在進行形で展開されている場所である。またルイシタ農園の農業労働者の約半数が女性であることにも示されるように、第一次産業人口が約4割を占めるフィリピンのなかで土地を持たない貧農女性が置かれた状況を知ることは、フィリピン現代女性史を知るうえで不可欠な課題でもある。以下にストライキの様子とそれをとりまく社会状況について報告したい。

ルイシタ農園は、マニラから北西に車で4時間ほど行ったタルラック市の南に位置する。2004年11月16日、ルイシタ農園でストライキに参加していた7名がフィリピン警察と国軍によって虐殺されるという事件が起こった。この事件をきっかけとしてルイシタ農園はフィリピン中が注目する社会的紛争の場となった。

科研プロジェクト「アジア現代女性史の研究」のフィリピンでの研究責任者であるフィリピン大学のジョイ・バリオス教授の案内で私たちはルイシタ農園を訪問することができた。フィリピンではジョイ教授をはじめとして多くの研究者たちが、このルイシタ農園の労働者のストライキに対して支援を寄せている。例えば教員の全国組織 CONTEND（民族主義と民主主義のための教員会議）は、後掲のような声明を発表するなどして研究者・教員たちに積極的な行動を呼びかけている。またフェミニズム芸術・文学論を専攻とするジョイ教授は、ルイシタ農民の虐殺直後に、その闘いをテーマとした詩集を編集し、発行している。

ジョイ教授たちのこうした関わりのおかげで、私たちはストライキをしている労働者とその家族、支援者たちの生の声を聞く機会をもつことができた。

マニラからハイウェイを北に4時間ほど行くと、タルラック州タルラック市に入る手前にルイシタという

地域はある。大通り沿いには大きなショッピング・モールやスターボックスなどが立ち並び、その周りにはニノイ・アキノ公園やニノイ・アキノ・センターの看板が見える。ここがコファンコ家とつながりを持った地域であることを感じさせる。

にぎやかな大通りからさらに車を 20 分ほど走らせると、ルイシタ農園の広大な敷地への入口に到着した。入口には警備員が立ち、入る車に ID 提示を求めた。「これより先私有地につき、域内規則遵守のこと」という意の大きな看板が立ち、ここから先がコファンコ家の支配する土地であることを思い知らされた。これより先は道路の両側に見渡す限りの広大なサトウキビ畑が広がる。車でさらに敷地の奥へと向かうと、ところどころに道路から畑に入るための門が見える。これらの門はどれも大きな丸太などでふさがれており、数人の人々がその周囲に座っていた。説明によれば、そこにいるのは労働者たちで、すべての門を封鎖して農園の操業を停止させているのだ、ということだった。

しばらく車を走らせ、バランガイ・バレテに到着した。バランガイとはフィリピンの最小行政単位のこと。いわば村のようなものである。広大なルイシタ農園のなかには五つほどの村が存在している。

コンクリート造りの家々の間にサリサリ・ストア（お菓子や日用品などを売る小さな雑貨屋）があり、その周囲でたくさんの子たちがにぎやかに跳ね回っていた。バランガイの中心には公民館もある。ここが虐殺のあった第一ゲートから最も近いコミュニティで、11月16日には多くの人々がここに逃げ込んだそうだ。住人はハシエンダの労働者とその家族。土地はコファンコ家の所有で、借地料を払って住んでいるということだった。

さらに 5 分ほど車に揺られて、第一ゲートに到着した。ゲート前にはテントが立ち並び、100 人くらいの労働者や家族、支援者たちが集まっていた。テレビを見る人、遊ぶ子ども、おしゃべりする人たち。すごし方はさまざまようだ。一見、のんびりとした雰囲気だが、彼らがここに集まっているのは目の前にたつ巨大な製糖工場の操業を停止させるため、つまりピケットラインを守るためである。そしてこのピケットラインを解散させるために、弾圧が行われたのだ。

ストライキ現場では、案内してくれた中部ルソン地域の農民団体活動家であり、ルイシタ農園の女性たちを支援しているリタさんとジョイ教授が人々に呼びかけて、20 人ほどの女性たちが集まってくれた。インタビューのなかで、この間の経緯や生活の状況、この土地の歴史的背景などについて聞くことができた。その内容と資料をもとに、いくつかの点からこのルイシタ農園の虐殺について報告したい。

11.16 虐殺

2004 年 11 月 16 日、ルイシタ農園で多数の死傷者を出す虐殺事件が発生した。労働条件と解雇撤回を求めてストライキを行っていた労働者とその支援者 7 名が、フィリピン国家警察の暴力を使った強制的な解散命令のなかで命を落としたのである。

貧困

ストライキは11月6日に開始された。その直接の原因は、製糖工場労働者の労働組合であるタルラック・セントラル・アズカレーラ労働組合 (CATLU) と、ルイシタ農園経営者との CBA (労使協約) 交渉が決裂したこと、そして同時期に農場労働者の労働組合である統一ルイシタ労働組合 (ULWU) に所属する 327 人が不当に解雇されたことにある。ルイシタ農園には約 5400 人の農場労働者が働いているが、その内約 2000 人は女性である。

ルイシタ農園の労働者たちは長年にわたって苦しい状況におかれてきた。サトウキビ畑での仕事は、会社側が必要とするときにしか与えられないため週に 1 日しか働けない。日給は 194.50 ペソ (約 381 円) であるが、そのためにこれが週給になる。さらにスクールバスの利用料、食料費・医療費などが天引きされると実際に手元にのこるのは、わずか 9.50 ペソ (約 19 円)。これが一週間の全収入である。これでは生活できないため、労働者たちは近くで魚を釣ったりしてなんとか生活している。またコファンコ家はサトウキビ畑の一部を工業団地などの形で転用しようとしており、それに伴って農場労働者の解雇が行われている。

リタさんの話によれば、フィリピンの農村では生活に困窮して、缶詰などの食料を対価に女性が売春をするというケースが多くあるそうだが、このルイシタ農園のなかでも労働者とコミュニティの組織化が進む以前は、そうしたことが日常的に行われていたそうだ。ルイシタ農園の女性労働者たちは農場での低賃金労働に従事すると同時に家内労働を負担し、さらに破綻した家計を支えるために売春を含む副業労働を担ってきたのである。

今回のストライキは前述の出来事を契機として、長年にわたる労働者の不満が爆発したものである。と同時にそこに参加する女性たちにとってはこうした幾重にも課せられた抑圧的状况に対する抵抗の闘争でもある。

11月6日にストライキを開始した労働者たちは、その当初から警察の放水や催涙弾の発砲などの弾圧を受けていた。だが彼らはそれに屈せず、ストライキを続けていた。

11月16日、その日は製糖工場の正面にある第一ゲート前で支援者たちを含めた集会在予定されていた。労働者に周辺地域から駆けつけた支援の人々を含め、数千名が朝から製糖工場に向かうゲート前に集まっていた。それを威圧するように軍用車両や放水車などが次々とゲートの向こう側に集まり緊張が高まるなか、午前9時から人々は集会を始めた。集会が続いていた午後3時、ゲート前に待機していた警官隊と国軍部隊から放水と催涙弾の発砲がはじまった。すでにこうした警察の弾圧を経験していた労働者たちは、混乱したがあくまで解散せず、拾い上げた催涙弾や石を投げ返すものもいた。混乱のなか突然、けたたましく銃声が響く。人々は逃げ惑い、地面に伏せる。血まみれで倒れた人。泣き叫ぶ声。鳴り続ける銃声。その生々しい状況はビデオ映像にもおさめられている。

この弾圧によって7名が命を失った。犠牲者には催涙ガスのなかで窒息死した2歳の女兒と、父親と一緒に様子を見に来ていて両親とともに射殺された男児も含まれている。また約120人が逮捕さ

れたが、そのなかには1人の妊婦を含む、12人の女性がいた。

インタビューに集まってくれた女性たちは、自分たちが投石に使うための石をたくさん集めたことや、催涙ガスを洗い流すための水を運んだことなど当日の様子を語り、自分たちがこの日の闘争を主体的に担ったのだ、ということ伝えてくれた。またこの日の出来事によって、子どもたちのなかには精神状態が不安定になっているものもあり、外で遊ぶことに怯えたりしている一方で、子どもたちが親のやっていることを理解し、一緒にシュプレヒコールをあげたりするようになったことなどを聞くことができた。

私たちがルイシタ農園を訪問した1月4日は、ちょうどこの虐殺の犠牲者の一人、青年労働者ジョワンコ・サンチェスの20歳の誕生日だった。ぜひとも彼の家族に会ってほしいという支援団体の誘いから、私たちはこのピケットラインに近い彼の家を訪れた。両親は食事を用意して、私たちをもてなしてくれた。父親は教会の牧師で、ジョワンコも教会の社会的活動に熱心に参加していた。家はルイシタ農園のなかにあり、ここで働いて家計を助けながら、大学で学んでいた。家族の話から、正義感の強い一人の青年、ジョワンコの姿が浮かんできた。自らの生活のために、またコミュニティーの仲間、ともに働く仲間たちのためにストライキに参加したジョワンコ。この虐殺の原因と責任はどこにあるのだろうか。

そのことを考えるために、ルイシタ農園をとりまく歴史社会背景についてすこし述べておきたい。

大土地所有制

フィリピンではスペイン植民地化で封建的大土地所有制が敷かれて以来、今日に至るまで少数の大地主による広大な農地の所有がつづいており、フィリピン社会に貧困を再生産し、また社会発展を阻害する大きな要因となっている。ルイシタ農園も総面積6,454ha(=8km×8km)の広大なサウキビ農園である。この農園の所有者は、ビサヤ・中部ルソンを中心に多くの農園と企業を経営するコファンコ家である。86年ピープルズ・パワーIで大統領となった「フィリピン民主化の象徴」コラソン・アキノ氏もコファンコ家の一員であった。

ここで働く労働者たちの話しによると、コファンコ家がルイシタ農園を所有するようになったのは、1957年。それまでスペイン系の資本によって所有されていた製糖工場を、コファンコ家が買収した。同時に周囲のサウキビ農園について「10年後に土地を耕作している農民に分配する」という条件のもとで政府から財政援助を受け、買い取った。しかしそれは名目だけで、実際には農地の分配は行われなかった。

一方、労働者たちの多くは、祖々父母の代からここに住んでいる。インタビューのなかで労働者たちは、昔この農地も森だったこと、自分たちの祖先がここを切り開いて農地にしたこと、祖先たちは登

記という概念を知らず、いつの間にか自分たちが土地なし農民になったこと、などを話してくれた。ここでも大地主と貧農というフィリピン社会が抱える社会構造とその歴史が垣間見える。

民主化と農地改革

1986年のピープルズ・パワーによって政権についたコラソン・アキノ大統領は、包括的農地改革計画(CARP)を発表した。フィリピンの貧農たちが求めてきた農地改革は、むろん大土地所有制の廃止と貧農への農地分配であった。しかしこのCARPには多くの抜け道があり、すでにその発表から20年近くが経過する今でもフィリピンの農地解放は順調に進んでいるとはいえない。

たとえばルイシタ農園の場合、コファンコ家が権益を固守するために用いたのは、SDO(株式分配制度)といわれる特例制度である。これは農地の所有名義を株式会社によるものへと転換させることによって、土地そのものではなく、株式を耕作者に分配するという形で農地改革が実施されたものと見なすことができる、という制度である。この制度によってルイシタ農園の農業労働者たちは自分たちの土地を手にすることができなくなってしまった。彼らは名目的な小株主になったが、実際にはさまざまな理由をつけられて配当金などの利益もほとんど得てはいない。

フィリピン民主化の象徴として知られるアキノ大統領は、コファンコ家という大地主一族の出身であり、そうであるがゆえに、彼女の「民主化」もまた本質的な限界をもつものだった。ルイシタ農園の農民たちにとって、そのことはあまりにも明かだったようだ。インタビューのなかでは、アキノ大統領が政権につき1989年に包括的農地改革計画(CARP)が実施されて以降、生活がさらに苦しくなったという声や、これまでも労働条件の改善や土地の分配を求める活動をしたためにコファンコ家によって殺された農民がいた、という話が聞かれた。

Assumption of Jurisdiction (裁判権の取上げ)

収奪する大地主と生存のために闘争する貧農。この二者の対立が11.16の虐殺事件として表出するには、もう一つ見落とすことのできない要因がある。フィリピン政府の対応とその背後にある労働政策である。

フィリピン労働法第263条g項には労働長官は「国益にかかわる労働争議に関しては、その法的決定権を持つことができ、法執行諸機関に法的秩序の確保を要請することができる」とある。労働長官パトリシア・トマスは、11月6日にルイシタ農園で労働者ストライキが開始されると直ちに、この法律を根拠としてAssumption of Jurisdiction(裁判権の取上げ)の実施のためにタルラック州警察に出動を命令した。これにより労働者たちはストライキ初日から激しい放水と催涙弾による暴力的な弾圧を受けたのである。

Assumption of Jurisdiction (裁判権の取上げ) はマルコス政権による戒厳令下で、労働運動を禁止するために出された大統領令の名残である。これによればなんらの審査手続きもなく、労働長官の独断的な決定によって「国益」という名目の下にストライキなどの労働権の行使を停止することができる。紛争事由そのものとはまったく無関係に、公権力によってストライキが弾圧されるのであり、国家による労働権の剥奪を意味している。ここにも 86 年以降の「民主化されたフィリピン」が拭い去ることのできない非民主的な制度が見える。

11.16 の虐殺は私兵による無法な行動や、兵士個人による暴走ではなかった。それはフィリピン国軍、タルラック州警察によってストライキ停止のための「Assumption of Jurisdiction (裁判権の取上げ)」という公的任務の一部として行われた。このことはフィリピンにおいて労働権がない、という驚くべき事実を示すものであり、労働組合をはじめとする広範な世論のなかに、虐殺に対する非難の声を呼び起こす要因ともなっている。

その後

11 月 16 日から二週間ほどしてタルラック農民連合の議長マルセリーノ・ベルトラン (53) が暗殺される事件が起こった。ベルトラン氏は 11.16 虐殺について国会の調査委員会で証言する予定になっていた人物である。自宅前で何者かによって銃殺されたベルトラン氏は死に際に「軍人にやられた」という言葉を残したという。また 1 月に入ってからルイシタ農園敷地内でゲート封鎖をしていた労働者二名が銃撃され、負傷するという事件がおきた。

それでも労働者たちは「飢えて死ぬより、闘って死んだほうがましだ」と語り、ストライキを続けた。こうしたなか政府とコファンコ家を批判する国内世論の高まりや、事態を憂慮するカトリック大司教の働きかけもあり、コファンコ家は労働組合との話し合いに応ずることに合意し、2 月 2 日第一回目の公式交渉がはじまっている。だがルイシタ農園はいまだ労働者たちのピケットラインによって封鎖されたままだ。「ストライキを維持することがコファンコ一族と交渉するための唯一の力だ」と労働者たちは語っている。

86 年民主化以降も、ルイシタ農園の労働者たちはその恩恵を享受することはなかった。そのことを考えるとき、86 年民主化は大多数の、とりわけ下層のフィリピン民衆を周辺化したままその社会-政治体制を再編したに過ぎなかったのか、と思わざるをえない。

今回の訪問で私たちはルイシタ農園での激しい労使紛争のさなかにいる女性たちの声を聞くことができた。そのなかでは農園所有者であるコファンコ家と自分たちを弾圧する政府に対する積年の怒りをひしひしと感じた。一方、今回の聞き取りでは農村の家族内での女性の状況や労使紛争のなかでのジェンダー的課題などについて聞く十分な時間がなかった。だが農園内では、私たちを案内してく

れた女性活動家リタさんをはじめとして女性運動団体からの支援と女性労働者たち自身の組織化も進んでいる。なによりストライキ現場には多くの女性たちがいて、実際に闘争を自らのものとして進めている。

その推移を見守りながら、さらにルイシタの女性たちの声を聞いていければと思う。

追記：この原稿を書き終えた後で、さらなる訃報に接することになった。2005年3月15日には私たちが訪問したバランガイ・バレテの住人であり、タルラック市議会議員でもあったアベラルド・ラデラ氏(45)が白昼、何者かによって射殺された。さらに3月13日には支援者であったフィリピン独立教会関係者が銃撃され、ウィリアム・タデナ司祭(37)が死亡、二人が重傷を負っている。